
東方紅人伝

はみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方紅人伝

【NNコード】

N9161T

【作者名】

はみ

【あらすじ】

「ごく当たり前な日々を送っていた。

こんな当たり前がずっと続くと思っていた。

だけど……

俺の日常は、あの日を境に変わってしまった。
でも後悔はない。

だって、こっちで守りたいものが出来たのだから。

初めてまして。

小説素人のはみと申します。

この作品は有名なSTGである東方シリーズにオリジナルキャラを入れた物となります。

オリジナルキャラが苦手な方は注意してください。
素人丸出しの文章で至らぬ点は多数存在すると思います。
なにか気付く点がございましたら是非教えてください。
それでは、よろしくお願ひします。

第1話

カーテンから朝日が差し込む。

時刻は午前5時過ぎ。

自室のベッドに眠る青年はカーテンの隙間から差し込む朝日に顔をしかめつつ寝返りを打つ。

まだ春先だというのに气温は高く、就寝前には青年の体を覆っていたであろうタオルケットは床に投げ出されていた。

「…………あっつ…………」

寝ぼけた声でそう呟いて、青年は再び寝返りを打つ。そのとき、けたたましい音をたてて青年の頭もとにあつた目覚まし時計が鳴り響いた。

「あ、――」

まるでゾンビのように手を伸ばし、青年は目覚まし時計を止める。変わりに響いたのはどこからか聞こえる鶏の鳴き声。

「あー……朝、か……」

あまり寝起きは良くないのか、青年は心底氣怠そうに体を起こす。タンクトップにハーフパンツ、良くもなれば悪くもない顔つき。唯一の特徴と言えば若干長めの髪だろうか？

もっともその髪は「切りに行くのが面倒」という青年の墮落の結果なのだが。

青年は起き上がった場所で軽くストレッチをして、服を着替える。

手にしたのは黒い上着に黒いズボン。
所謂学生服という物である。

「さて、と。今日も頑張りますかね……」

非常にポジティブな発言内容だが、表情と声のトーンが一致していない。

そんな彼がノロノロと歩きドアノブに手を伸ばしたときだった。

「バカ息子、グッドモーニングーー！」

馬鹿でかい声とともに開かれるドア。

恐ろしい速度で迫るドア。

嫌な音を立てて顔にぶつかるドア。

無様に這い蹲る青年。

そんな青年を見た男は一言。

「……寝相悪いな、息子よ」

「……親父はマナーが悪いよ……」

場所は移る。

朝の些細な親子の「ハローケーション」を終えて、青年は厨房に立っていた。

周囲には生クリームやスポンジケーキ。

学生服の上にエプロンを着けて、青年は腕まくつをした。

「どうあえず……」これを作つておけば大丈夫だろ

青年の実家は喫茶店。

母親を早くに亡くし、幼い頃から彼は父親を手伝つていた。

人格破綻者だが、父親の腕は一流。

そこだけは自慢できると彼は思つている。

「アッサラームツ！ いえい息子、作つてるうー？」

「……」

そう、思つてゐるのだ。

彼は深いため息とともにケーキ作りに戻つていった。

「じゃあ親父、俺は学校行つて来るよ」

「今日は早めに帰つてくれるのだ。今日は女子高生が攻めてくる

「ああ、はいはい……」

カラソカラソと入店を知らせるベルを鳴らし店を出て行く。
かばんを肩にかけて、気だるそうに歩く。
いつもの通学路。毎日通りなれた道だった。

「……ん？」

そう、「だつた

青年の通学路、いつも通つてゐるその道が今日は工事中だつた。

「あれ……？工事中か」

仕方ないと溜め息をついて、踵を返す。歩いて来た道を少し戻つてショートカットのために公園へ。

公園には学校が休みなのか、小学生らしき男の子たちがサッカーをしていた。

「何故だろう。小学生が羨ましい」

切ないことを呟いて公園を抜けようとしたときだつた。

青年の横をサッカーボールが転がつていく。

それに続いて男の子が駆けていく。

しかし小学生の脚力、公園内では追い付けず、ボールは道路へと飛び出していった。

「 ッ！」

そして男の子も道路へ。

その瞬間、手に持つ鞄を投げ捨てて青年は駆け出した。
何故ならば、

「逃げろっ！」

トラックが男の子に向かい進んでいたから。だが厳しい。どう足搔いても車と人の脚では差が有りすぎる。

トラックは見る見るうちに少年へと近付いていく。
そこでようやく少年はトラックに気がついた。

ボールを大切そうに胸に抱えて、少年は迫り来る暴力を呆然と眺める。

人はあまりにも巨大な恐怖と直面したとき何も出来ず動けずにいる
とあるが、少年はまさにその状況だった。

「つまおおおおおおおつ……」

……その少年を、衝撃が襲つた。

しかしそれは正面から来る凶器と化したトランプによるものではな
く。

「……悪いな。間に合ひやうになーから蹴つちました」

真横から来るものだつた。

少年は横に吹き飛ばされながらただ眺める。今まで自分が立つてい
たその場所に、見知らぬ青年がいる。

少年はどこかぼんやりと、この青年に吹き飛ばされたのだなど考え
て青年の顔を見た。

青年は笑っていた。

笑いながら、トラックと激突した。

「あら、なんて奇遇。新しい玩具を見つけるなんて」

そして少年は見てしまった。

おそらく自分の代わりに吹き飛ばされた青年が、暗い黒い闇の隙間
に引きずり込まれていくのを。

……少年は事故のことを包み隠さず周囲に話した。
しかし、誰も信じなかつた。

そして、青年の日常は終わり……

青年の非日常が始まる。

第2話？

赤い。

朱い。

紅い。

すべてが紅く染まっていた。

長い廊下の床、壁、天井、窓の外の霧……

その全てが紅かった。

コツ……コツ……

その世界に響き渡る音。

廊下の果てに、その音の正体がいた。

「…………」

それはとても可憐な少女だった。

特徴的な帽子に少しウェーブがかかった青い髪。病的なまでに白い肌。フランス人形のような服。

おそらく10人中10人は美少女と断言するビジュアルの持ち主。

だが、その少女は人間としてあるまじきモノを持っていた。

紅い瞳と悪魔の翼。

翼は作り物ではないと主張するように、持ち主である少女の動きに合わせて揺れ動く。

紅い瞳は見るもの全てを魅了する魔力を持っている。

しかし、その2つがあつても　否、その2つがあるが故に少女は
美しかつた。

「……？」

不意に、少女の歩みが止まる。
振り返り暫く止まつていたかと思つと、

「ふふっ！」

笑つて、跳んだ。

飛んではいな。跳んでいるのだ。

人外の速度で床を蹴り、壁を蹴り、天井を蹴り跳んでいるのだ。

少女は笑う。

「いきなり氣配が現れたつ！しかも、こんなに素敵な香りまでつけ
てつ！」

少女は跳ぶ。

先ほどまで何の氣配もなかつたはずの、自身の部屋へ向けて一心不
乱に。

きつと、何か楽しいことが起こつてゐるのだと確信に近いものを感
じつつ少女は跳んだ。

その道は、少女の足では一瞬だつた。

自身の部屋の扉を蹴破つてなかに入る。
派手な入室とは違つて着地は音をたてなかつた。

少女の視線の先には、その場に相応しくないものがいた。

床に座り込み、負傷している左腕を押さえつつ呆然と少女を見上げているのは、

「それで……」このレミリア＝スカーレットの寝室に何のよがしさら？人間」

車にひかれた筈の青年だった。

第2話？

青年は混乱していた。

自分自身は確実に死んだと思っていた。
実際左腕は折れており、激痛が体を駆け巡っている。
しかし、生きている。

百歩譲つて生きているのはいいとしよう。だが、現状が理解できない。

道路で車と激突した自分が、今どこにいるのか分からぬ。
周囲を見渡してみると、どう考えても病院には思えない。

極めつけは目の前の少女だ。

(どうみても……本物だよな)

羽根。

少女の動きに合わせて動くそれと、先ほど扉を突き破つて現れた非現実感。

夢だとしても左腕の痛みが現実へ戻してくれる。

つまり、

「事故ったと思つたら知らない場所にいたけど実際事故の怪我はしてて目の前にはよくわからない女の子がいる状況」

ところへ。

「……なんだそりゃ」

当然の反応である。
しかしレミコアと言つた少女はなかなか反応を示さない青年に対し苛立つてしまっている様子。

「あら、無視? レディーを蔑ろにするのは紳士じやないわよ」

「う……

靴音を響かせてレミリアは一步前に出る。
それだけで青年が感じる重圧は増した。

ガタガタと体が震える。

絶対的な恐怖、青年の生き物としての本能が告げていた。

この少女は、化け物だと。

自身の体を襲う恐怖と怪我の激痛に耐えて、青年は立ち上がる。
震える身体、乱れる呼吸、滴る左手からの血。

満身創痍だった。精神的にも肉体的にも。
でも、

「一いつや、申し訳なかつたな。ここはキミの寝室かい? どうしてオレがここにいるかはわからないが、不法侵入して申し訳なかつた」

彼は気丈に振舞つた。

それは生来のものなのか、それともこれまでの人生で彼が培つてきたもののかは分からぬ。

それでも彼はそう振舞つた。

異形である少女に恐れを察されないよう」。

「……へえ

だがしかし、それは無意味。

まったくもって意味がなかつた。

だつて、彼女は化け物だから。

彼の人生の何十倍も生きてきた化け物だから。

彼が感じている恐怖、それでも気丈に振舞おうとする心、そのすべてを読んでいた。

だからこそ、彼女は笑つた。

実際に愉快なモノだと、彼女は笑つた。

「あはははははっ！ずいぶんとズレているのね。怖いのに、恐ろしいのに、逃げたくて仕方ないのに私の前に立つている。矛盾していると思わない？」

「……

少女の言葉を聞いて青年は確信した。

この娘は、人ではなくて

「ねえ、教えて？　今にも殺されそうになっている人間？」

きっと、自分が理解できないものなのだろうとこうことを。

第2話？

青年は咄嗟にその場から後ろに跳んだ。
見えたわけではない。

ただ純粋に『嫌な予感』がしたからだ。

「あら……」

だが、その予感は的中していた。

何故ならば直視できない速さでレミリアが腕を振り下ろし、青年がいた場所の床を殴り碎いていたからだ。

後ろに跳んだ行為で再び彼の身体を激痛が襲う。

痛みのあまり気を失いそうになるが再び襲い来る激痛で彼の意識は保たれた。

それは良いことか悪いことかはわからない。ただ彼に分かることはその痛みがあるかぎり、自分が生きているといつことだった。

「やるじゃない。今の攻撃、見えてたの？」

対する悪魔は、余裕の表情。

床を碎いたと言つのに彼女の手は傷一つ負っていない。

改めて、青年は化け物だと認識した。

「はあっ、はあっ、見えるわけないだろ。嫌な予感がしたんだ

」

「　　はい、隙あり」

息も絶え絶えな青年の腹部に響く衝撃。

青年の身体が宙に浮く。

いや、違う。

地面と水平に、彼の身体は飛んでいった。

重力なんて感じさせない勢いで飛んでいき、彼は壁にぶつかる。

「ツ！」

「ほり、はやく構えなさい。じゃないと……」

壁にぶつかった衝撃で、青年の肺のなかの空氣がすべて吐き出される。

悪魔の言葉を聞いて、青年は無理やり顔を上げた。

悪魔は、すぐそこにいた。

「なにも分からぬまま、死んじゃうわよ？」

単純な一撃。

腕を振り上げて、ただ下ろす。

動作にして2秒足らず。だが青年にとってはそれが永遠のように永く感じた。

（動かぬきや、死ぬ……！）

だから、青年は動けた。

自分の人生で一度も感じた死の気配、そのときに『動く』ことの大切さを知った青年は体を突き動かした。

まず左足を前へ。そのまま左足を軸ひくつと回してレミコアに背を向ける。

一步前へ出た」とによつてレミコアの爪ではなく肘あたりが青年の右肩に直撃する。

「ぐつ……うおおおつー

「つー?」

その肩に乗せられたレミコアの右腕を掴み、前屈みになる。

つまりは、一本背負い。あまりに無様で美しさの欠片も見当たらぬ形だったが、それは成功した。

「ふふつ、投げ技とはね」

投げるまでは。

青年にとつて誤算だったのは背後が壁だったこと。
そして相手が化け物だったということだった。

投げた姿勢のまま、青年は愕然とした。

本来なら壁に背中を叩き付けられるハズだっただろ? レミコアは、笑みを浮かべて青年を見下ろしていた。
背中の羽根を壁に突き刺して。

上下逆さまになつたレミコアは、笑つた。青年は顔を上げる。丁度田の前に美しい悪魔の顔があつた。

「気に入ったわ。殺すのはなし。とりあえず……眠りなさいな」

その言葉とともに、青年の額に衝撃が走る。

頭突きを受けたと理解するのと、意識を失うのは同時だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9161t/>

東方紅人伝

2011年12月20日22時50分発行